

埼臨技だより



発行所 公益社団法人 埼玉県臨床検査技師会 〒330-0072 さいたま市浦和区領家7-14-7
TEL 048(824)4077 FAX 048(824)4095 URL:<http://www.sairingi.com/>
携帯URL:<http://www.sairingi.com/keitai/index.html> X(旧Twitter): @sairingi

第53回 埼玉県医学検査学会のお知らせ

開催日：2025年12月7日(日)

開催場所：ソニックシティ

テーマ：Hop Step Jump

サブテーマ：～ 飛躍する未来に向けて、今学ぼう～



～ 飛躍する未来に向けて、今学ぼう～

【運営を担当して】

第53回埼玉県医学検査学会・実行委員会運営部を担当しております、埼玉県立小児医療センターの伊吹早紀と申します。

さて、普段は院内の細菌検査に専念している私が、なぜ実行委員に関わらせてもらったかといいますと…。実は、半ば騙されたような形で始まったのです(笑)。それが今年の冬のことでした。いつもお世話になっている上司から、「ちょっと学会手伝ってこない～？」と誘われ、軽い気持ちで「いいですよ！」と返事をしたのが最後です。その3時間後にはメンバー入り確定メールが送られていました。私はてっきり、当日の実務を少しお手伝いするだけだと思い込んでいました。ところが、なんと！と当初はちょっぴりだけその上司を恨みましたよね(笑)。しかし、今はこの一大プロジェクトに、運営部に、関わる事ができて良かった！となんだかんだで思っております。私は市民公開講演のポスターデザインを作製しましたが、おかげ様でGemmiとデザインツールとお友達になることができました。もし臨床検査技師として日々の業務だけに専念していたならば、AI画像生成やデザインに挑戦する機会は、きっと得られなかったことでしょう。

自分の未知領域の仕事へのチャレンジ、それから運営部の方たちとの出会い。結果的には、騙される形で実行委員になったことが良い経験となりました。たとえ最初は消極的だったとしても、挑戦することで得られるものや新たなスキルは、大人になってからでも意外と多いものだと感じています。ちょっと世界を広げて頑張りたい若者のみなさま、実行委員に挑戦してみたいかでしょうか！

学会まであと90日をきりました。これからさらに忙しい日々が続くかもしれませんが、参加者のみなさまから「行って良かった！」と思っただけの学会を目指して、全力を尽くしてまいります。

(文責：第53回埼玉県医学検査学会 運営部 伊吹早紀)

【学会参加事前登録について】

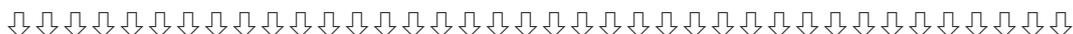
第53回埼玉県医学検査学会・実行委員会では会計部(運営部兼務)を担当しております、さいたま市立病院の佐藤則子と申します。

暑さ厳しい日々が続く中、学会開催まで残り約3か月となりました。実行委員一同、参加される皆様にとって有意義な場となるよう準備を進めております。

学会はソニックシティにて開催します。参加費の支払いは、昨年同様、Peatix（ピーティックス）を利用した事前登録方式です。クレジットカードなどででの支払いに対応しております。また、ランチョンセミナーのお申し込みも参加登録時に一緒におこなうことができます。参加費も昨年同様、埼臨技会員（日臨技会員）：2,000円、賛助会員：2,000円、非会員：5,000円、学生：無料となっております。

実行委員会では、検討事項が決まり次第、埼臨技だよりや学会ホームページ、公式LINEで皆さまにお知らせします。皆さま、学会公式LINEの登録もよろしく願いいたします。

アプリをダウンロードしてお待ちください



Google Play



App Store



(文責：第53回埼玉県医学検査学会 会計部(運営部兼務) 佐藤則子)



埼臨技 新入会員向け研修会開催される

7月30日(水)新入会員向け研修会がRaiBoC Hallにて開催された。

講演1は松岡優会長より「臨床検査技師会とは?～埼臨技について～」、講演2は久保居由紀子氏より「日当直業務について(輸血編)」、講演3は杉村楓氏より「日当直業務について(臨床化学編)」と題し、それぞれ講演があった。参加者には本講演で得られた情報を、明日からの技師会活動や業務にぜひ活用してほしい。

以下、参加者からの感想を掲載する。

埼玉県立小児医療センター
藤本 麗萌

令和7年度埼臨技主催の新入会員向け研修会に参加しました。

講演1では埼臨技の歴史や現在の活動を学びました。研修会に積極的に参加し、担当している業務の検査についての知識だけでなく、様々な知識を学びたいと思いました。講演2では輸血のガイドラインや臨床からの問い合わせの実例を学びました。日当直業務では外部との連絡や連携が重要になるので、慌てずに落ち着いた対応を心掛けたいと思います。講演3では実例をもとに臨床化学のデータの見方について学びました。輸液や検体放置などで起こるデータの異変に気付き、臨床に結果を送る前に正しい結果であるかを考えられるように意識していきたいと思いました。

今回の研修で得た内容を活かして日常の業務に励みたいと思います。講師の先生方、ありがとうございました。

埼玉医科大学病院

長谷川 舟

令和7年度新入会員向け研修会に参加させていただきました。

松岡会長の講演では、技師会の役割や目的、そして今後私たちがどのように関わっていくべきかを丁寧にご説明いただきました。また、臨床検査技師が果たす社会的な役割の広さに驚かされました。令和5年度こども霞が関見学デーへの参加や、深谷市福祉健康まつりなど、地域のあらゆる世代の方々に向けた教育活動や啓発イベントに積極的に関わっていることを知り、病院内の業務にとどまらず、未来の技師育成や社会貢献にも力を入れている姿勢に深く感銘を受けました。また、久保居氏と杉村氏の講演では、実際の現場で日当直業務にあたっている方々の話を聞くことができました。夜間や休日の限られた人員の中で、緊急検査に迅速かつ正確に対応するプレッシャーや責任の重さを感じながらも、患者さんの命を支えているという誇りを持って業務に取り組んでいる姿勢が強く印象に残りました。自分自身も将来、こうした重要な役割を担う立場になることを意識し、日々の業務や学びに真摯に向き合っていきたいと感じました。

今回の研修を通して、臨床検査技師としての役割の広さを実感しました。学んだことを業務や自己成長に活かし、引き続き研修会に積極的に参加してスキルアップに努めたいと思います。



埼玉県済生会川口総合病院

マリク ムブリム アリ

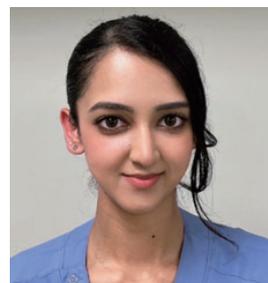
令和7年度埼臨技主催の新入会員向け研修会に参加しました。

久保居氏の講演では、当直時に起こりやすいトラブルの対処法など学ぶことができました。また、夜間の対応は緊急性が高まるため、些細な判断ミスが大きな問題を引き起こす可能性があることを認識しました。

杉村氏の講演では、当直中に遭遇しやすい臨床化学の異常データの症例をあげながら、説明していただきました。検体採取の段階から精度管理は始まっていることを認識し、視野を広げて業務を行う必要があると実感しました。

今後は、今回学んだことを活かして日々の業務や日直・当直業務に努めていきたいです。

また、多くの研修会に参加し、自分自身の知識を向上させていきたいです。



当日会場の様子

研究班研修会報告

テーマ やらず嫌いを克服？ できると楽しい末梢神経エコー

主催 生理検査研究班

実施日時：2025年7月4日 19時00分～20時00分

会場：Web開催 教科・点数：専門教科－20点

講師：日野出 勇次（環境省 大臣官房環境保健部放射線健康管理担当参事官室）

参加人数：会員53名

出席した研究班班員：南雲涼太 工藤淳子 新井雅人 松平悠 草間冬子 島内一輝

研修内容の概要・感想など

生理検査研究班から今年3つ目の研修会として、「やらず嫌いを克服？できると楽しい末梢神経エコー」をテーマに日野出氏を講師にWebで開催した。

講演では、超音波での主な末梢神経、頸部神経根、腕神経叢における描出方法、各神経障害症例の報告、神経超音波での確認ポイントについて解説があった。

末梢神経の検査と聞くと、検査技師は神経伝導検査を思い浮かべる方が多いと思われる。しかし、超音波装置の進歩に伴い、詳細な末梢神経の形態学的評価を非侵襲的に繰り返し検査することが可能となり、末梢神経超音波の需要が高まっている。ただし、神経によっては浅層から深層にまで潜り込み再度浅層へ走行するなど、神経の位置を特定し、超音波で神経の走行を連続的に描出することは初学者にはとても難しい。また、分野的にもコアな領域であるのは確かで、取り掛かりにくい印象があることも否めない。

今回の講演では、エコー動画・シェーマ・プローブマークを用いながら同時にすべてを動かし、各神経の走行を解説されていた。そのため、現在どこを描出しているのかがわかりやすく、さらにポインターを用いながら神経の所在を追うことで、初学者でも神経を判断することが容易であった。

末梢神経超音波を始めるには、①解剖と走行を頭に叩き込む。②自身に超音波を当て、理解を深める。③正中神経や尺骨神経と神経の中で描出し易い神経から行う。というアドバイスが印象的だった。「やらず嫌いを克服」と主題にあるように、まず超音波上で神経を探すことから始め、「楽しい」と思える技師が今回の講演で増えることに期待したい。

(文責：島内一輝)

テーマ 令和7年度 輸血検査実技研修会 ～ 正しい手技を身につけ、予期せぬ反応に対応しよう ～

主催 輸血検査研究班

実施日時：2025年7月13日 9時00分～16時30分

会場：公立大学法人 埼玉県立大学 教科・点数：専門教科－20点

講師：宮澤 翔子（埼玉県済生会川口総合病院）

廣田 渉（さいたま赤十字病院）

大垣 秀友（上尾中央医科グループ八潮中央総合病院）

佐々木 翔太（草加市立病院）

参加人数：会員10名

出席した研究班班員：宮澤翔子 廣田渉 大垣秀友 佐々木翔太

研修内容の概要・感想など

今年度の実技研修会は「正しい手技を身につけ、予期せぬ反応に対応しよう」をテーマとして、午前血液型検査、不規則抗体スクリーニング、午後不規則抗体同定検査、直接抗グロ

ブリン試験、抗体解離試験の実技研修を行った。

午前では、試験管法の基本操作である、試薬・試験管の準備、赤血球浮遊液の作成方法、凝集反応の見方など注意点を確認しながら、3症例の検体に血液型検査、不規則抗体スクリーニングを実施した。午後は、不規則抗体スクリーニングで陽性となった検体に対して不規則抗体同定検査などの追加検査を実施しつつ、検査反応時間の合間に机上問題にも取り組んだ。また、4症例目の検体に対して直接抗グロブリン試験、抗体解離試験を実施した。

午前、午後ともに大垣氏が各症例の解説を行い、異常反応に対する考え方や追加すべき検査、製剤選択などの解答を行った。

今回の研修会では、他業務と兼任している技師や輸血検査を始めて間もない技師が多く参加していた。輸血検査の基本操作や検査手順、結果判定や製剤選択の重要性を理解することができた。また、自施設では実施していない検査を経験することで輸血検査への学びが深まったと感じた。

本研修会を通じて輸血検査技術向上に貢献することができた。また、参加者には研修会で得た知識と技術を業務に活かし、安全な輸血検査を実践していくことを期待する。



(文責：佐々木翔太)

テーマ 感染性廃棄物の基礎

主催 公衆衛生検査研究班

実施日時：2025年7月17日 19時00分～20時00分

会場：Web開催 教科・点数：基礎教科－20点

講師：田中 雄大（埼玉県 環境部 産業廃棄物指導課）

参加人数：会員60名 非会員1名

出席した研究班班員：鈴木由美子 坂田竜二 佐藤和 吉田翔平

研修内容の概要・感想など

廃棄物の基本的な内容から排出事業者責任、感染性廃棄物の処理、指導事例の紹介、排出量の推移などについて田中氏が講演した。

廃棄物は一般廃棄物と産業廃棄物に分かれ、爆発性、毒性、感染性、その他に人の健康または生活環境に係る被害を生ずるおそれがある性状を有する廃棄物は、それぞれ特別管理一般廃棄物（感染性一般廃棄物が含まれる）と特別管理産業廃棄物（感染性産業廃棄物が含まれる）に区分されている。

廃棄物の処理は排出者が最後まで責任を持つ必要があり、法律で排出事業者責任について定められている。排出事業者が産業廃棄物を廃棄する場合、自らが適正に処理する自己処理と、都道府県知事（政令市長）の許可を持った産業廃棄物処理業者（以下、委託業者）に委託する委託処理がある。委託処理の場合、排出事業者は廃棄物の処理状況・能力の確認（現地調査が望ましい）をしたうえで適正な委託業者を選択し、政令で定められている委託基準に準じて委託する。さらに、排出事業者は産業廃棄物を引き渡す際、委託業者にマニフェスト（産業廃棄物管理票）を交付し、処理終了に係るマニフェストの写しの送付を受け、5年間は保存しなけ

ればならない。委託基準やマニフェスト関係の義務に違反すると排出事業者は罰則を受けることとなる。また、委託業者は運搬から処理までを行うものと思ってしまうがちであるが、「運搬」と「処理」は別の事業範囲であるため、運搬業者と処理業者、それぞれ委託する必要がある。

感染性廃棄物については定義、判断基準（判断フロー）、処理（他の廃棄物との分別、梱包の容器、梱包時の留意点、施設内の移動・保管、バイオハザードマークの表示）などの説明があった。感染性廃棄物を容器に入れる際は、容量の8割程度に留めるよう注意する。「廃棄物にかかる費用を抑えたい」「まだまだ入るから密閉しなくていい」と思う人もいるかもしれないが、内容物の詰め込みすぎは、容器の蓋の脱落、注射針の突き抜け、内容物が飛散・流出するおそれがあり、二次被害を起こす危険性がある。田中氏からも紹介があった、環境省の『廃棄物処理法に基づく感染性廃棄物処理マニュアル』をウェブで検索し、一度確認してみるとよい。

埼玉県内で適正処理を指導した事例について解説があり、抜粋して2つの事例を紹介する。事例①保健所の立ち入り検査に廃棄物を所管する部署の職員が同行した際、分析に使用した血液のサンプルが橙色バイオハザードマークの容器に廃棄されていたため、赤色バイオハザードマークの容器に廃棄するよう指導。事例②老人ホームから排出された使用済み注射針が一般廃棄物のごみ集積所に捨てられ、回収業者がけがをしたとの苦情から、立ち入りを行い指導。事例①では指導がなければいつか被害が起きていた可能性があり、事例②では不適切な処理による針刺し事故が起きてしまった。

感染性廃棄物の排出量は全国的に増加傾向にあり、新型コロナウイルスが流行した時期は一気に増加していた。感染性廃棄物の急激な増加は処理業者の処理能力をひっ迫し、場合によっては排出抑制の要請が出る可能性もある。感染症の拡大は医療だけでなく、様々な機関に影響があることを改めて理解した。

今回、感染性廃棄物について医療機関と異なる視点からの講演で、新鮮であった。感染性廃棄物を不適切に廃棄することは、採血や検査などで働く私たちだけでなく、その先で廃棄物の回収、運搬、処理をする方々にも危険が及ぶことを認識することができた。本研修会が、感染性廃棄物の廃棄状況や教育状況について、各施設で再確認する機会になれば幸いである。

（文責：吉田翔平）

テーマ 免疫測定法の原理と特徴 ～ 異常反応例を交えて ～

主催 血清検査研究班

実施日時：2025年7月18日 19時00分～20時30分

会場：ソニックシティビル 905会議室 教科・点数：基礎教科ー20点

講師：岡倉 勇太（株式会社TLC戸田中央臨床検査研究所）

参加人数：会員14名 賛助会員1名

出席した研究班班員：渡邊剛 山本晃司 岡倉勇太 飯山恵 森圭介 吉田萌香 深田愛

研修内容の概要・感想など

今回の研修会では免疫測定法の原理と特徴、免疫検査における異常反応とその対処法に関する内容であった。

免疫測定法は抗原抗体反応を原理として広く用いられている。高い特異性や広い測定レンジを有する一方で、非特異反応などは避けられない。

免疫測定法は反応様式によって競合法とサンドイッチ法に分けられる。競合法は一定量の抗体に対して検体中の抗原と一定量の標識抗原が競合的に反応する。高感度化が困難なためそれを解消する遅延法がある。サンドイッチ法は過剰量の抗体と過剰量の標識抗体で検体中の目的物質を挟む方法である。競合法に比べ感度が良く、測定範囲が広いが、低分子抗原の測定は難しい。そのため低分子測定には競合法が用いられるが、反応様式はサンドイッチ法に移行している。

次にB/F分離の有無により不均一法と均一法に分けられる。B/F分離は固相法が主流であり2ステップ法と1ステップ法がある。1ステップ法は迅速で簡便ではあるが、抗原量が多い場合はプロゾン現象により偽低値になる可能性があるため、測定範囲を狭くする必要がある。不均一法はB/F分離を行う方法であり、EIA、ELISA、BLEIA、CLIA、ECLIAがある。EIAは標識酵素にPODやALPが主に用いられ、基質の違いによりEIA、FEIA、CLEIAに分けられ、検出感度は化学発光、蛍光、吸光（呈色）の順に高いといわれている。化学発光には2つのタイプがあり、CLEIAは標識酵素を利用して発光物質が間接的に発光するのに対し、CLIA、ECLIAは抗原または抗体に標識した発光物質が直接発光する。CLIAは瞬間的な発光を捉えるためバックグラウンドの影響を軽減することができるのに対し、ECLIAは発光を電氣的に制御することで連続して発光することが可能であるという特徴を持つ。

他にもB/F分離を必要としない均一法や免疫凝集反応、免疫比濁/比ろう法、イムノクロマト法の説明があった。

免疫測定法は結果の解釈に交差反応や非特異反応を考慮する必要がある。今回は検体中の成分由来により生じた異常反応について3例紹介があった。1例目はTP、RA、IL-2Rでタイムコースエラーを検出した事例であった。検体の性状を確認すると冷蔵保存で白濁を認め、加温処理後は白濁が消失した。原因はクリオグロブリンによる試薬との異常反応であり、加温処理をして測定することが望ましい。2例目はTP抗体定量で陽性、別法確認でイムノクロマト法を実施したところ検体が展開されず判定不能となった事例であった。他の検査項目を確認するとIgMが異常高値であった。原因は血漿過粘性症候群によるイムノクロマト法の展開不良であった。3例目は免疫専用装置にてHIV Ag/Abが陽性、イムノクロマト法では陰性と判定不一致の事例であった。検体を倍々希釈して得られた実測値が理論値と乖離し、非特異反応を疑いメーカーに精査依頼した。装置の測定値は異好抗体による非特異反応の可能性が高いとのことだった。

免疫検査は多様化しており、測定法の違いにより測定値や結果判定が異なる場合もあるため、自施設で使用している分析装置や試薬の仕組み、測定法を理解することが重要である。異常反応に遭遇した場合は、タイムコースの確認や別法確認、希釈直線性試験など自施設で検証できることもあり、日常業務に生かすことができる内容であった。

(文責：深田愛)

テーマ 患者予後を変える3つのアプローチ

主催 微生物検査研究班

実施日時：2025年7月18日 19時00分～20時30分

会場：ソニックシティビル 601会議室 教科・点数：専門教科ー20点

講師：古市 美穂子（地方独立行政法人埼玉県立病院機構 埼玉県立小児医療センター）

参加人数：会員22名 賛助会員3名 非会員1名

出席した研究班班員：小棚雅寛 酒井利育 今井美美 伊波嵩之 大塚聖也 伊吹早紀

研修内容の概要・感想など

はじめに、古市医師より、医師目線での感染症診療の考え方について解説があった。感染症診療は、患者背景や重症度を中心として、「臓器」・「微生物」・「抗微生物薬」の3点からなる三角形をベースに考える。「臓器」と「微生物」での相互ベクトルは感染源となっている臓器から起炎菌の想定をする関係、また検出された微生物より感染の範囲がどの臓器まで及ぶかを考慮することを表している。「微生物」から「抗微生物薬」へ伸びるベクトルは、想定または検出した微生物から、どの抗微生物薬を使用するか決定することを表している。「臓器」から「抗微生物薬」へ伸びるベクトルは感染源となる臓器への移行性を考慮して、抗微生物薬を決定することを表している。この3点において、微生物検査担当技師は「微生物」と「抗微生物薬」の情報を臨床へ提供する役割がある。そのため、より医師が受け取りやすい微生物検査結

果の返し方、情報の伝え方が患者予後を変えることに貢献すると解説があった。

次に、臨床へ提示する情報の一つであるアンチバイオグラムを課題に、5グループに分かれ、グループワークを行った。各施設より提出してもらったアンチバイオグラムを各グループへ配布し、そのアンチバイオグラムから読み取れる情報、良い点、改善したらさらに良くなる点について協議、発表を行った。グループワーク後の発表では、各施設で工夫を凝らし、アンチバイオグラムが作成されていることが伺えた。これにより、様々な工夫ポイントの共有をすることができた。また、古市医師より、感染症診療時において、アンチバイオグラムは①見やすい②ポケットブルでアクセスしやすい③データが信用できる④判断が容易である、の4点を意識したものであると、より医師が使いやすく、適切な抗菌薬を選択できると解説があった。特に、掲載する抗微生物薬は院内採用薬であること、商品名を併記していること、CLSIのTier表など菌に対する使用優先度について分かりやすい資料であると、さらに医師はアンチバイオグラムを利用しやすくなるとのことであった。今一度、自施設のアンチバイオグラムを見直していきたい。

続いて、数施設から持参いただいた耐性菌検出状況などの院内委員会資料をそれぞれのグループ内で読み取れる情報、良い点、改善したらさらに良くなる点について協議、発表を行った。こちらにおいても、グループワーク後の発表では、各施設において作成方法や形式は様々でありながら、工夫や情報が詰まった委員会資料が作成されていることが伺えた。感染症診療は多職種が関わるため、他職種から見たときに分かりやすい資料であることが求められる。微生物検査室が提出する資料により、院内で何が起きているのか、どんな行動をとれば良いかを読み取り易い資料の作成が重要であると解説があった。また、他職種など外部との連携も重要なポイントであり、細菌検査室の外に積極的に行き、情報の獲得や提供をしていくことが、患者予後をより良く変えていくアプローチとなる。

今回の研修会が、感染症診療により活用されるような微生物検査結果の報告方法や、アンチバイオグラム及び委員会資料の作成方法をブラッシュアップする機会となれば幸いである。

(文責：伊吹早紀)

テーマ 尿沈渣検査を始める前に② ～ 上皮細胞と円柱 ～

主催 一般検査研究班

実施日時：2025年7月23日 19時00分～20時00分

会場：Web開催 教科・点数：基礎教科ー20点

講演 1：上皮細胞の鑑別ポイント

講師 1：小針 奈穂美（埼玉医科大学病院）

講演 2：円柱の鑑別ポイント

講師 2：藤村 和夫（埼玉県済生会川口総合病院）

参加人数：会員131名

出席した研究班班員：藤村和夫 柿沼智史 渡邊裕樹 小針奈穂美 松本実華 織田喜子
林達也 福島明音

研修内容の概要・感想など

本研修会では、尿沈渣検査における上皮細胞と円柱の鑑別ポイントについての講演であった。講演では、上皮細胞の形態的特徴やその出現意義に加え、円柱の種類と各々が示唆する病態との関連性について解説があった。

講演1は、小針氏より尿沈渣検査における各種上皮細胞（尿細管上皮細胞、尿路上皮細胞、扁平上皮細胞、ポドサイトなど）について、構造的特徴や染色性、細胞の配列様式などを踏まえた鑑別ポイントが解説された。細胞質の色調や表面構造、核の形態、細胞配列パターンなど、多角的な観察視点による鑑別が重要である。

特に、巣状分節性糸球体硬化症（FSGS）などで多く出現するポドサイトの鑑別については、

細胞質表面が均質状でティッシュ様の外観を呈し、複数の核を有することが特徴である。ポドサイトの出現は、糸球体硬化の進行や蛋白尿の減少に関連する可能性があり、臨床的意義も大きいことが示唆されている。

講演2では、藤村氏より、円柱の形成機序や病態別の出現傾向について、具体的なエビデンスに基づいた解説があった。顆粒円柱やフィブリン円柱などは、腎疾患における病態を把握するためには重要な指標である。

特に、慢性腎臓病（CKD）の進行度と硝子円柱の出現頻度、ならびにBNP値との関連性、腎前性の急性腎障害（AKI）と急性尿細管壊死（ATN）の鑑別における顆粒円柱の出現の有無など、臨床とのつながりを意識した内容であることが印象的であった。

また、円柱の出現が腎疾患の病態を反映している点も興味深く、尿沈渣検査が臨床と密接に関わる検査であることを再確認する内容であった。尿沈渣検査は、腎・泌尿器の状態を把握するうえで重要な診断補助のツールであることを、改めて学ぶ機会であった。

今回の研修を通じて、尿沈渣検査中の出現した細胞や成分の鑑別における精度向上が、病態の理解に直結する重要な要素であることを再認識した。尿沈渣検査が病態把握と臨床判断に直結する検査であることを再認識する機会であり、今後の検査精度の向上に寄与する内容であった。
(文責：渡邊裕樹)

テーマ EVG染色を極める！ ～ 検討からみえてきた染色プロトコール ～

主催 病理検査研究班

実施日時：2025年7月25日 19時00分～21時00分

会場：浦和コミュニティーセンター 第13会議室 教科・点数：専門教科ー20点

講演1：EVG染色の原理・基礎

講師1：細沼 佑介（埼玉医科大学国際医療センター 病理診断部）

講演2：染色条件の検討結果 ～ 自施設のプロトコールと比較してみよう！～

講師2：三鍋 慎也（防衛医科大学校病院 検査部）

参加人数：会員39名

出席した研究班班員：三鍋慎也 細沼佑介 小島朋子 松本祐弥 三瓶祐也 渋谷樹 佐藤達也
石川勇貴

研修内容の概要・感想など

今回の研修会は、EVG染色に焦点を向け、基本的な原理・基礎から実際の染色プロトコールの比較・検討をテーマに開催した。

細沼氏はEVG染色の原理と基礎について解説した。EVG染色の目的は線維の染め分けによる血管系の同定や病変の検索、肺癌の診断、胸腹膜への浸潤などの多岐にわたる。染め分ける線維は主に、弾性線維と膠原線維、筋線維である。弾性線維を染色する原理としては①物理的要素、②疎水結合、③ファンデルワールス力、④塩酸酸性下における斥力が関係している。レゾルシンフクシンは前田変法の出現により安定した染色が可能となった。膠原線維と筋線維の染め分けはピクリン酸と酸フクシンの分子量が関係しており、色素の拡散速度の違いによって染色時間が左右される。分子量がより大きいシリウスレッドは退色しにくく、より鮮やかに染色されるため、酸フクシンの代用となりうるが、メーカーや製造ロット間の色素含有量が大きく異なるため、調整には検討を有する。核染色に用いる鉄ヘマトキシリンは、塩化第二鉄による酸化・媒染の効果により、酸性の強い染色過程での分別や脱色の影響を受けにくいため、EVG染色に適している。続いて、染色手順について解説した。ワンギーソン液の後の手短な水洗作業によって膠原線維と筋線維のコントラストを上げることが、重要なポイントの一つであるとのことだった。

三鍋氏は研究班員施設から事前にアンケート調査をした染色プロトコールの比較・検討結果について解説した。まず、染色プロトコールについて全8施設を比較すると同じものが一つと

してなく、病理における標準化の難しさを考えさせられた。次に検討内容として各染色液の種類や浸漬時間、分別方法について実際の検討したスライド写真を提示しながら解説した。レゾルシンフクシンは染色時間が長いほど濃く細かく染まるが、共染が強くなり、分別には塩酸が少し入ったエタノール系溶液がよい。核ヘマトキシリンはI液II液どちらが多くてもうまく染色されず、等量混合が基本である。分別は塩酸が少し入った溶液がよい。ワンギーソン液は、処方により酸フクシンまたはシリウスレッドが用いられるが、染色の色味の違いの他に、分子量と官能基の構造よりシリウスレッドでは結合力が強く、酸フクシンは細かい膠原線維を染め分けられるといった違いがあるとのことであった。分別は酢酸水もしくはごく短時間の水洗でコントラストが綺麗に染まるとの内容だった。さらにアンケート調査を行った施設の染色時の工夫についても紹介した。以上の検討結果から、本研修会で推奨する染色プロトコールと各工程の注意すべきポイントも解説され、若手からベテラン技師まで非常に充実した内容であった。

(文責：佐藤達也、石川勇貴)

テーマ 二級臨床検査士「臨床化学」を取得してスキルアップ

主催 臨床化学検査研究班

実施日時：2025年7月25日 19時00分～20時30分

会 場：ソニックシティビル 604会議室 教科・点数：専門教科ー20点

講演 1：最新！合格体験記 ～ 備えあれば憂いなし ～

講師 1：関根 梢恵（上尾中央以下グループ 白岡中央総合病院）

講演 2：計算が分かると面白い！実務にも役立つスキルを身に付けよう

講師 2：小林 麻里子（北埼玉医師会メディカルセンター）

参加人数：会員23名 賛助会員1名

出席した研究班班員：杉村楓 廣瀬良磨 永井謙一 福島渉 稲葉拓郎 田中満里奈 関根梢恵
河野邊和弘

研修内容の概要・感想など

二級臨床検査士「臨床化学」を取得してスキルアップというテーマで、8月に実施される二級試験へ向け2つの講演を行った。

関根氏による講演「最新！合格体験記 ～備えあれば憂いなし～」では、受験経験のある関根氏より、試験の概要、試験当日の流れ、筆記試験・実技試験の対策方法、出題傾向の解説がされた。実技試験では、反応原理の穴埋め問題、計算問題、試料の調整と測定、結果の考察問題が出題されたとのことであった。また、実技試験で使用するマイクロピペットやメスピペットの使用上の注意点として、使用するマイクロピペットの選択の仕方やプレウェットング、試料の吸引・排出方法が挙げられた。自動化が進んでいる臨床化学分野において、測定原理などの知識や計算力・考察力が試薬や機器のエラーが起きた際には重要とのことだった。

小林氏による講演「計算が分かると面白い！実務にも役立つスキルを身に付けよう」では、mol（モル）単位などの国際単位の説明から、実際の筆記試験・計算問題の傾向として、濃度計算・終濃度の求め方、物質濃度と吸光度（透過率）の関係を表すLambert-Beerの法則、酵素の反応速度と基質濃度の関係を表すミカエリス・メンテン式、回収率・浸透圧・感度特異度の計算方法などについて解りやすく過去問題を用いて解説をされた。実技試験の基本的対策として検量線用標準液の希釈系列の調整から測定、検量線作図、作成した検量線を用いて吸光度から試料の濃度（活性）を求める流れの説明があった。検量線作成時の注意点として記載する直線は濃度0、吸光度0の原点を通る直線として、標準液の最大濃度のプロットを突き抜けない点が挙げられた。多くの計算問題を解き、計算に慣れておくことが大切とのことだった。

今回の研修会では、試験対策として重要なポイントをわかりやすく提示され8月に迫る試験に役立つ情報が多くあった。二級試験を通じて、基礎的な知識と正しい技術をしっかりと習得することは正確なデータを提供するためにとっても重要と感じた。

(文責：河野邊 和弘)

令和7年度
公益社団法人埼玉県臨床検査技師会
第5回 理事会議事録

日時：令和7年8月14日(木) 19時00分より

場所：埼臨技事務所
さいたま市浦和区領家7-14-7
(Zoom会議)

議題：Ⅰ. 行動報告 Ⅱ. 報告事項
Ⅲ. 承認事項 Ⅳ. 議題

出席：(理事)松岡 猪浦 山口 濱本 阿部
西田 三木 佐瀬 網野 藤原
伊藤 塚原 神嶋 笛木
長谷川 神戸 工藤 久保田
長岡 原 土田

(監事)島村

欠席：(理事)小林

(監事)細谷

本日の理事会の出席者は22名であった。理事の出席者は21名で、現在22名の過半数に達しており、定款第33条第1項の決議を行うに必要な要件を満たしていることを確認した。

議長は、定款第32条第1項より、松岡優会長が務めることとなった。

Ⅰ. 行動報告

(令和7年7月10日～令和7年8月13日)

7月10日(木)令和7年度第4回理事会：

松岡、猪浦、山口、濱本、阿部、
西田、三木、網野、伊藤、塚原、
神嶋、笛木、長谷川、神戸、小林、
工藤、久保田、長岡、原、土田、
島村

7月11日(金)川越市保健所精度管理業務：松岡

7月17日(木)2026年度日臨技 関甲信支部・首都圏支部医学検査学会(第62回)

第1回準備委員会：

松岡、猪浦、山口、濱本、阿部、
西田、三木、佐瀬、網野、塚原、
神嶋、笛木、長谷川、神戸、小林、
工藤、長岡、久保田、原、土田、

7月17日(木)日本医療科学大学会長講演：松岡

7月18日(金)川越市保健所精度管理業務：松岡

7月23日(水)ワークライフバランス推進委員会

会議：猪浦、塚原、神嶋

7月25日(金)川越市保健所精度管理業務：松岡

7月26日(土)日臨技第2回理事会：猪浦

7月29日(火)HP業者打合せ：濱本

7月30日(水)埼臨技新入会員向け研修会：

松岡、塚原、長谷川、神嶋、笛木

8月4日(月)医療関連サービス振興会立入り調査：山口

8月5日(火)支部学会事前説明会：

松岡、猪浦、山口、濱本、神戸、
原

8月5日(火)青年部委員会会議：

塚原、濱本、神戸

8月7日(木)霞が関こども見学デー：神戸

Ⅱ. 報告事項

1 事務局

1) 8月6・7日(水・木)霞が関こども見学デーに会員2名を派遣した。(別紙資料1)

2) 8月6日(水)埼玉県より、公衆衛生事業功労者に対する知事表彰について当会より推薦した4名の受賞が決定した。

山本 英俊氏(株式会社ビー・エム・エル BML総合研究所)

深田 茂則氏(埼玉医科大学病院)

久保居 由紀子氏(独立行政法人地域医療機能推進機構埼玉メディカルセンター)

山下 康衣氏(埼玉県臨床検査技師会 前事務部長)

2 総務部

1) 7月29日(火)埼臨技ホームページリニューアル打合せ (別紙資料2)

2) 8月15日(金)だより第555号発行予定

3) 8月17日(日)タスクシフト指定講習会(埼玉県036)を開催予定：

猪浦、神戸、工藤、藤原、西田、長谷川、
佐瀬

3 事業部

1) 7月23日(水)ワークライフバランス推進委員会会議を開催した。(別紙資料3)

2) 7月30日(水)新入会員向け研修会を開催した。(別紙資料4)

3) 8月2日(土)3日(日)青年部委員2名が一人八県若手メンバーによる交流会に参加した。(別紙資料5)

4) 8月5日(火)青年部委員会会議を開催し、人材育成研修会の内容について協議した。(別紙資料6)

5) 第25回わらび健康まつり計画書を蕨市保健センターへ提出した。(別紙資料7)

6) 全国「検査と健康展」の会場をソニックシティへ変更とした。開催日程は11月23日(日)に決定した。

4 学術部

1) 7月8日(火)令和7年度理事研究班合同会議・第1回研究班運営委員会を開催した。(別紙資料8)

2) 10・11月生涯教育研修プログラムを埼臨技HPに掲載した。

5 精度保証部 特になし

6 会計部

1) 令和7年度正会員費31名155,000円、入会金27名27,000円、再入会金1名1,000円、合計183,000円の入金があった。

2) 日臨技より、日臨技生涯教育推進研修会助成金146,000円の入金があった。
計330,000円/7回

3) 日臨技より、令和7年度定時総会議決権行使における回収手数料112,000円(受領率62.26%、2,240件×50円)の入金があった。

- 4) 日臨技より令和7年度全国「検査と健康展」、開催助成金273,000円の入金があった。
- 5) 石井印刷へ、埼臨技だより第554号Web版11P55,000円、埼臨技会誌Vol.72-No.1、1,064,250円、仕分費30,646円、封筒代60,500円、合計1,210,396円を支払った。
- 6) Microsoft365更新料24,737円を支払った。
- 7 精度管理委員会**
- 1) 令和7年埼玉県臨床検査精度管理調査試料発送作業を9月6日(土)実施予定。
- 8 一都八県会長会議**
- 1) 神奈川県臨床検査技師会芹澤会長の逝去に伴い生花と弔電の対応を行った。
- 9 日臨技関甲信支部 特になし**
- 10 日臨技**
- 1) 7月26日(土)第2回理事会に出席した。(別紙資料9)
- 11 第53回埼玉県医学検査学会**
- 1) 7月8日(火)第9回実行委員会が開催された。(別紙資料10)
- 2) 第53回埼玉県医学検査学会への名義後援10社に依頼するための書類を提出した。なお、埼玉県病院薬剤師会の理事会が8月、その次が10月とのことから、急ぐ案件のため、三役承認を得て対応した。
- 12 2026年度日臨技関甲信支部・首都圏支部医学検査学会(第62回)**
- 1) 第1回準備委員会を開催した。(別紙資料11)
- III. 承認事項**
- 1 事務局**
- 1) 会員動向(令和7年度分)
令和7年8月1日現在
会員数 3,712名[令和6年度会員数3,612名]
(新入会員216名)
賛助会員 67社[令和6年度72社]
承認された。
- 2) 事務員の夏季賞与について
上記の件について、濱本隆明事務局長より発言があり、審議の結果、承認された。
- 2 総務部 特になし**
- 3 事業部**
- 1) ワークライフバランス推進委員会研修会の講師を日臨技の横地会長へ依頼したい。
上記の件について、神嶋敏子理事より発言があり、審議の結果、承認された。
なお、講師の都合も考慮し、日曜日以外の複数の開催日を候補に挙げるとし、委員会内で検討することとした。
- 4 学術部**
- 1) 研究班運営マニュアルフォルダの改訂について(資料は事前に理事メールで配布済み)
上記の件について、久保田亮学術部長より発言があり、審議の結果、承認された。
- 2) 研修会の事業変更について(別紙資料12)
上記の件について、久保田亮学術部長より発言があり、審議の結果、承認された。
- 5 精度保証部 特になし**
- 6 会計部 特になし**
- 7 精度管理委員会 特になし**
- 8 第53回埼玉県医学検査学会**
- 1) 青年部企画において、学生向けに事前アンケートを実施するために昨年度同様、Googleフォームを利用する許可をいただきたい。
上記の件について、伊藤隆史学会担当理事より発言があり、審議の結果、承認された。
- 9 2026年度日臨技関甲信支部・首都圏支部医学検査学会(第62回)**
特になし
- IV. 議題**
- 1 事務局 特になし**
- 2 総務部 特になし**
- 3 事業部 特になし**
- 4 学術部 特になし**
- 5 精度保証部 特になし**
- 6 会計部 特になし**
- 以上で本日の議事を終了し、議長は協力を謝して閉会とした。

あ と が き

猛暑が続く日々ですが、皆様いかがお過ごしでしょうか?「だより」が発行される頃には暦の上では「秋」になっている頃と思いますが、多分まだまだ暑い日が続いているのではないのでしょうか…

AIになぜ夏が暑いのか聞いたところ「日照時間が長くなり、地面が強く温められるため」との回答でした。この夏は梅雨明けも早く、太陽がピカピカの猛暑の日々。秋もしばらくは暑い日が続きそうですね。皆様、体調など崩さぬようご自愛くださいませ。

(神嶋 記)

